

意識進化の先端：Individualist～Strategist～Alchemist～Ironist
鈴木 規夫 Ph. D. (Norio001@nifty.com)

はじめに

インテグラル思想において、人間意識の各発達段階は、歴史的な進化の過程において、その具体的な形態を確定していくものとしてとらえられる。これまでの人類の意識進化の過程において、その具体的な形態を確定したのは合理性段階までの段階であるといわれ、Vision Logic (VL) 段階以降の段階については、まだ、その具体的な形態は確定していないといわれている。しかし、これは、必ずしもそれらの段階が全く探求されていないということではない。実際、今日の人類社会においても、それらの段階にたいする要求は存在しており、そうした生存状況は確実にそうした意識段階の発生を促進している（例：複数の文化をまきこんだ国際的な組織活動——そこでは、複数の文化を調整することだけでなく、複数の文化を内包することのできるあたらしい文化を構築することが要求される）。そうした特異な生存状況を日常的に体験している人々は、人類の集合意識の先駆的探求者として、これからの人類意識の進化の方向性を開拓しているといえるのである。

ここで留意すべきことは、こうしたとりくみは少数の人間による実験的なものであるために、窮極的には、今後の方向性（“probability wave”）を設定するものにすぎないということである。今後の人類の生存状況の展開のなかで、こうしたとりくみがどのように深化していくのかということは、これからの時代を生きるひとりひとりの主体的な参加のありかたに影響されることになる。また、今日、惑星規模で急速に進行している自然環境の劣化や自然資源の枯渇等、AQAL の他領域の動向に影響されることはいうまでもないだろう。

しかし、そうした不確実性を留意することができるなら、同時代に存在する先駆的探求者のところみは豊富な洞察をもたらしてくれるだろう。ここでは、そうした視野から、この瞬間に集合規模で発生しようとしている VL 段階の意識構造について詳細に探求してみたい。

「支援と挑戦」 (“support & challenge”)

VL段階の意識構造を基盤としたリーダーシップのありかたについて探求した Action Inquiry: The Secret of Timely Transforming Leadership において、著者 (Bill Torbert・Susanne Cook-Greuter等) が常に個人と組織を同時にとりあげていることは非常に重要なことである。インテグラル思想において個人と集合は相互関係にあるものとしてとらえられるが、ここでは、とりわけ、集合が個人にとり「支援と挑戦」 (“support & challenge”) を提供する空間¹ として機能するという側面に着目して議論を進めていくことにする。

まず、VL のはじめの 2 段階 (Individualist 段階と Strategist 段階) の「行動論理」

（“Action-Logic”）について簡潔に紹介する（それぞれの発達段階の構造の詳細については、Susanne Cook-Greuter（2005）を参照していただきたい）。

Individualist 段階 (4/5) と Strategist 段階 (5)

Individualist 段階においては、自己の主観領域が絶対化され、それを純粋に体験することが個人の関心事となる。ここにおいて、自己は「からだ」(Body)と「こころ」(Mind)の統合体である“Centaur”として確立され、そうした統合された有機体が開示する諸々の洞察が重視されるようになるのである。また、こうした構造の確立を契機として、いわゆる“doing-orientation”(行動志向・将来志向)から“being-orientation”(存在志向・現在志向)への転換がおこることになる。

Individualist 段階における自己の主観領域の絶対化は、しばしば、Individualist を社会的な相互関係から離脱・乖離させることとなる。日常の役割や責任を放擲することをおして(または距離を確保することをおして)、こうして内向化のために必要となる物理的・精神的な空間を確保することにより、Individualist は自己の特異性(uniqueness)を模索することに集中しようとするのである。その背景にある欲求とは、社会的な役割や責任をまっとうするために自己の人生を他者(社会)にあずけるのではなく、むしろ、自己の人生の所有権を回復したいという欲求である。

結果として、Individualist 段階に到達するとき、多くの人々は、組織から離脱して、独立した個人事業者として活動を展開することになる。ただ、こうした Individualist の内向傾向を尊重して、必要な物理的・精神的な空間を提供することができる場合、組織は、貴重な個性的・創造的な発明を獲得することができることになる。

Individualist 段階における自己の主観領域の絶対化は、また、客観的な「事実」や「真実」と形容されるものにたいする先鋭的な懐疑を醸成する。Individualist 段階における認識能力は、そうした客観的な「事実」や「真実」と形容されるものが実際には常に諸々の文脈(例:歴史的な文脈・社会的な文脈)のなかで「構築」されるものであることを認識するのである。結果として、彼らは、常に、ひとつの主張がなされるときに、そこで主張される「事実」や「真実」がある文脈のなかで妥当性をもつ「構築物」にすぎないことを強調しようとする。ここでは、そうした諸々の文脈に規定されたものとしての「事実」や「真実」ととらえなすことをおして、それらの権威を否定・破壊する能力を所有する存在として自己が確立されるのである。

しばしば観察されるように、こうした自己の主観領域への拘泥は、自己肥大を醸成することをおして、Individualists を真の意味での関係性から疎外する可能性を内包している(ただし、こうした関係性は、過度の束縛をしないという「相互尊重」の精神に支えられた関係性であるように見える場合もある)。あらゆる外的な束縛を排除しようとするこの段階の典型的姿勢(“Nobody tells me what to do”)にたいして、近年、インテグラル思想の関係者により批判がくわえられていることは周知のところである。

Individualistsの経験することになる深刻な問題は、存在する複数の文脈のなかで経験される諸々の事象（例：自己・他者・真実・事実）を統合することができず、その多様性のなかで麻痺状態に陥ることである。時として、Individualistsは、瞬間・瞬間が開示する特異性に注意を奪われるために、それらが内包する共通性を見出すことができなくなるのである。Strategist段階のひとつの特徴は、多様性に麻痺することなく、それらを統合することができることである。²

こうした統合能力は、また、「意味」や「物語」を構想する能力として発現することになる。Strategistsは、人間の認識行為というものが必然的に「意味」や「物語」の構築をともなうものであることを認識する。確かに、こうした認識はIndividualist段階においても存在するが、しかし、Strategist段階においては、こうした認識は、混沌と麻痺にたいする拘泥としてではなく、むしろ、「意味」や「物語」を意識的・意図的に創造することのできる自律的存在としての自己の「自己決定」（“self-determination”）と「自己実現」（“self-actualization”）のこころみとして表現されることになる。つまり、前段階を特長づけていた相対主義的な姿勢は、ここでは意味構築や物語構築にたいする積極的な「とりくみ」（“commitment and responsibility”）に支えられた姿勢へと変容することになるのである。また、こうした変容は、思考形態のみならず、個人の感情のありかたに明瞭にあらわれることになることについても注意するべきであろう。

Individualist段階では、他者は自己の自律性にたいする脅威をもたらすものとして経験されるために、Individualistsはしばしば濃密な人間関係を忌避することになる。また、成熟した統合機能の欠如は、そうした他者との関係をとおしてひきだされることになるかもしれない自己の側面（「影」）にたいする恐怖を醸成することになる。Individualist段階において、人間関係を回避することは、自己の統合性を維持するうえで、必要となるのである。

Strategist段階では、成熟した統合機能が確立されるために、他者は、自己の自律性にたいする脅威をもたらすものとしてではなく、むしろ、自己理解と自己実現を促進する貴重な存在として経験されることになる。つまり、人間関係は、自己の様々な側面（光と影）をひきだす文脈として認識されることをとおして、知識と知恵の源として経験されるのである。

Strategistsの直面する代表的な問題は、こうして確立された「意味創造者」としての自己が内包する潜在能力（「使命」）を完全に実現できない可能性にたいする恐怖であるといえるだろう。この段階における主要な衝動は、自己実現（self-actualization）と自己充足（self-fulfillment）であるが、こうした関心は、また、他者の成長と充足にたいする関心として顕現することになる。Strategist段階においては、成長とは善なるものとして信奉されるために、結果として、他者による成長の拒絶（意志の欠如）はStrategistsにとり非常に腹立たしいものとして経験される傾向にある。ある意味では、Strategist段階における最大の問題は、こうした種類の非寛容であるということが出来るだろう。

尚、Strategist (5) 段階のあとに、Constructive-Aware/Alchemist (5/6) 、そして、Unitive/Ironist (6) 段階といわれる段階が存在する。トランスパーソナル段階と形容することのできる段階はこの Unitive/Ironist と形容される段階以降の段階であることに留意されたい。

組織という文脈において

上記のように、Individualists と Strategists は、高度の認識構造を基盤として、合理性段階以降の特徴である客観的な真実や事実の「構築性」（「虚構性」）にたいする認識を獲得する。しかし、そうした認識を基盤として立ちあがる行動論理は、実際には非常に異なるものとなる。

上記のように、合理性段階以降の人格成長の課題は、新しく出現する内面性をどう統合するかということである。ここでは、こうした課題が常に関係性という文脈のなかでとりくまれることになることを考慮したうえで、議論を進めていくことにする。

Individualist 段階においては、透徹した洞察能力は、ときとして、「自己」（自己の自律性）にたいする執着を生みだすことをとおして、関係性からの疎外として結実する。今日、国内・国外において展開している Individualist 段階を基盤とする諸々の形態の組織活動が頓挫している背景には、まさにこの段階特有のこうした問題が存在するのである。

組織というものは、本質的には、組織の構成員の「自己にたいする執着」を組織の共通の目的にむけて昇華する装置である。つまり、それは、個人の自己発見・自己充足——自己の忘却——を可能とする空間（“Intersubjective Space”）なのである。

しかし、Individualists は、その構造的な傾向のために、しばしば、こうした組織への参画を「自己の自律性の喪失」として恐怖して、忌避することになる。実際、多くの Individualists は、組織に参画しながら、同時に、いかにして自己の自律性を確保するかという課題に執着しつづけることになりがちである。つまり、そこには、組織に自己の存在を賭けるという要素が致命的に欠如しているのである。結果として、Individualists により構成される組織は、過酷な状況において、非常に容易に溶解する傾向にある（例：経営が悪化した状況における従業員の流出）。

Individualists は、組織の構成員としていちおう自己を定義しつつ、同時に、いかにして自己の自律性を確保するかという課題に執着しつづける。結果として、彼らは、常に、参画をすることをとおして犠牲にされることになる（であろう）。「自己」を保護することに注意をしつづけることになる。つまり、自己の存在

を賭けるという責任をいかに回避するかということに、腐心しつづけるのである。

上記のような混沌と麻痺に拘泥する Individualists の行動論理にたいして、「意味」や「物語」を積極的に創造することを志向する Strategists の行動論理は、組織活動においても特徴的に反映されることになる。そこでは、成熟した統合能力を基盤として成立する意味構築へのとりくみが組織の「核」として確立されるのである。つまり、そこでは、Strategist 段階において獲得された多様性の背後に息づく普遍的な価値の認識と信頼のうえに、組織の存在意義がそうした視野から模索されることになるのである。

Bill Torbert and associates (2004) は、Jim Collinsの著作Good to Great: Why Some Companies Make the Leap...and Others Don't (2001) をとりあげて、そこで「偉大な組織として紹介されている企業組織において機能している発想 (“level 5 leadership”) がまさにこうした段階の行動論理を基盤として成立しているものである可能性を示唆している (p. 115) 。ここでは、Collins の前作にあたる Built to Last: Successful Habits of Visionary Companies (1994/2002) を参照して、具体的にそうした行動論理を基盤として成立する組織のいくつかの特徴について検討してみたい。こうした作業をとおして、Strategists と形容されえる人間が具体的にどのような行動をする人間であるかを把握することができるだろう。

組織構築にたいするcommitment

Strategists は、組織が、特別に優秀な個人の存在に依存することなく、永続的に発展していくことができるために必要となる構造の構築に精力を傾注する人間である。いうまでもなく、組織の生存がそうした特別な人物の能力に依存するとき、組織は必然的に深刻な脆弱性を内包することになる。その特別な人間が組織を去ることになるとき（もしくは、その人間の能力が枯渇するとき）、組織は文字どおりその「核」となる生命力を奪われることになるのである。

Strategists は、組織の意図するものが普遍的価値を基盤とするものであることを認識している。つまり、それが、世代をこえて、永続的に存在して、世界に貢献をしつづけていくべきものであることが確信されているのである。まさにそれゆえに、組織が普遍的価値の体現として存続していくことができるように、彼らは永続的な組織構造 (LR) を構築することに精力を傾注するのである。

こうした姿勢は、自らの個人としての富や名声を獲得することに腐心する合理性段階のものとも、また、観察者としての自己に拘泥するために実際的な行動力を欠如する Individualist 段階のものとも異なる姿勢である。むしろ、それは、あらゆる個人の存在をこえた普遍的価値を謙虚に尊重・信奉することをとおして得られる創造的な態度であるということができよう。

こうした発想を基盤とする組織において重視されるのは、ひとつひとつの活動や製品ではなく、むしろ、普遍的価値の体現としての組織そのものなのである。つまり、ひとつひとつの製品を創造するための装置として組織があるのではなく、組織を成長させるための装置としてそれらが存在するのである。魅力的な活動や製品を単発的に生み出すことは、卓抜した個人と戦略があれば可能となる。しかし、普遍的価値の体現としての組織を維持するためには、「核」となる価値を尊重・継承・深化しつづけていく組織構造を構築することが必要となるのである。そして、**Strategists** とは、まさにこうした **commitment** をする人間なのである。彼らにとり、組織こそが窮極的な創造物なのである。

対極性の統合³

Collins & Porras (1994/2002) は、**Strategist** 段階の組織が、「対極性の統合」において、非常にすぐれた能力を発揮することを指摘する。具体的な例としては、下記のもので挙げられる。

● 理念と収益の統合

Strategist 段階の組織は、組織の窮極的な生命線が普遍的価値の飽くなき体現にあることを認識している。しかし、これは決して普遍的価値（理念）の追求のために収益性を犠牲にするということではない。収益性は組織の生命の基盤となるものであり、それなしには理念の追求はできない。いうまでもなく、それらは統合されるべきものなのである（“transcend & include”）。

Strategist 段階の組織は、組織の窮極的な存在意義として抱擁された理念を掲げるだけでなく、実際に実現することにとりくみつづける。いうまでもなく、重要なことは、理念をもつことではなく、理念を実現することに懸命にとりくみつづけることなのである（とりわけ、企業理念の宣言が「常識」として確立した今日の社会において、こうした実践にたいする **commitment** は、これまでになく必要とされることになる）。⁴

真に普遍的な理念とは神秘的なものである。それは、この時空間においては、完全には実現することはできないものであるといえるだろう。**Strategist** 段階の組織が、常に、大局的な視野に立ちながら、その飽くなき追求を継続することができるのは、その意識がとらえているものが神秘であるからなのである。

● 保守と革新の統合

上記のような組織の理念にたいする明確な姿勢は、また、それ以外のものにたいする柔軟性をもたらすことになる。つまり、日常のあらゆる活動をとおして、組織の「核」を構成するものにたいして忠実であることへの十分な「支援と挑戦」があたえられることにより、構成員のなかには、確実な実感として、それがいかなることを意味するのかについての理解が醸成されることになる。こう

した実感を醸成することをおして、組織は、構成員のなかに、逆に、「核」ではないものにたいする柔軟性を育むことができるのである。

実務領域における諸々の活動規範は、長い時間の経過のなかでくりかえして踏襲されることをとおして、あたりまえのものとして定着することになる。結果として、それらは、いつのまにか、あたかも「核」を構成するものであるかのように認識されることになるのである。Strategist 段階の組織は、「核」となる理念を保持することにたいしては最大の注意をはらうが、しかし、その「表現」である具体的な実践方法については、常に、変革の可能性を意識しながらとりくむことを重視する。

Strategist 段階の行動論理が、自己実現という進化の衝動を絶対化するものであることは、組織活動の領域においても先鋭的に表現されることになる。そこでは、この行動論理において絶対化される進化の衝動を実現することが、絶えざる変革を志向する意志として組織の文化に脈々と息づくことになるのである。必然的に——多数の組織が外的な生存状況（“Life Conditions”）の圧力に対応するかたちで変革にとりくむのにたいして——Strategist 段階の変革はあくまでも内発的なものとなる。「核」でないものは、あらゆるものが検討の対象としてとりあげられ、変革の可能性が模索されるのである。

● 大胆な目標の設定

Strategist 段階の組織は、しばしば、大胆な目標（“Big Hairy Audacious Goals”・“BHAG”）を設定する行動計画を実施する組織である。⁵ こうした行動計画はときとして常識の範囲をこえたものとしてとらえられかねないものである（例：1960年代に合衆国大統領のJohn F. Kennedyにより提唱された宇宙計画）。しかし、また、こうした計画は、関係者の存在をわしづかみにして、彼らに自己の存在を捧げることを決意させるほどの魅力（魔力）をそなえたものでもある。Strategist 段階の組織は、こうした目標を設定して、関係者の「命」や「魂」に火を灯すことをとおして、組織の進化を実現しようとするのである。こうした長期的目標の設定——そして、その実現へのとりくみ——も、また、Strategist 段階の組織が、特別に優秀な個人の存在への依存という罫を克服するために開発した対応法であるといえるだろう。

ここで留意すべきことは、こうした commitment が可能となるためには、圧倒的な心的エネルギーが必要となることである。ここで、合理性段階以降に達成される人格構造の深化——具体的には、「こころ」と「からだ」の統合体である“Centaur”の確立（Individualist 段階）、そして、普遍性への信頼を基盤とした、死の恐怖の減少（Strategist 段階）——がそのための前提条件として重要な意味をもつことは確かであろう。また、Strategist 段階においては、高度の統合能力の基盤のもと、これまでにないかたちで無意識の統合が可能となるために、創

造的活動に投入することのできる心的エネルギーの絶対量が増加することも、こうした大胆な発想を可能とする条件であるといえる。

- 「狂信的」な文化～帰属と自律の統合

Individualists は、常に、あらゆる外的な干渉にたいして防衛的であることをとおして、自己の自律性を保護しようとする傾向にある。必然的に、**Individualist** 段階の発想にもとづく組織は、こうした構成員の過敏な自己防衛傾向を刺激することのないように、基本的に要求度の低い文化を構築することになる。

Strategist 段階の発想にもとづく組織においては、構成員のあいだに「核」となる理念にたいする明確な **commitment** が存在している。結果として、そこでは、適性をもつ人間と適性をもたない人間が非常に明確に峻別されることになる。窮極的に「核」にたいする「執着」こそが組織の存続の「鍵」となることを認識する **Strategist** 段階の組織において、それを共有することのできない人間にたいして寛容度が非常にひくい文化が意図的に醸成されることは、むしろ、当然のことであるといえよう。つまり、そこでは、二極的発想が積極的に抱擁されるのである (**Individualists** は、寛容という理念を強調することをおして、こうした発想を否定するが、しかし、そうした態度そのものが二極的発想であることに無自覚である)。

この意味では、**Strategist** 段階の発想にもとづく組織には、確かに、「狂信的」 (“cult-like”) な文化が息づいているといえるだろう。しかし、ここで注意すべきことは、こうした文化が、あくまでも、“cult”ではなく、“cult-like”であるということである。そこには、真の意味で狂信的組織において観察されるように、組織があたかも“**Individual Holon**”のようなものとして構想 (錯覚) されて運営されるようなことはない。つまり、そこでは、構成員があたかも組織という **super-organism** の構成要素としてとらえられて、組織の意志に従属する存在としてとらえられることはないのである。むしろ、そこでは、個人に可能なかぎり最大の自律性と主体性を保障しようとする。

実際、Collins & Porras (1994/2002) の調査が証明するように、**Strategist** 段階の組織は、他の組織と比較して、構成員と構成部門の自律性と主体性をさらに尊重する傾向にある。つまり、そこでは、「核」を「狂信的」に共有することが、実際には、日常の業務活動の領域において、いつそうの自由をもたらすことが認識されるのである。ここにおいても、外的な干渉にたいしてあまりに防衛的であるあまり、しばしば、無秩序状態に陥る **Individualist** 段階の組織との違いが明確に把握できるだろう。

- 実験的精神～行動と計画の統合

Strategist 段階の組織は、恒常的な進化のダイナミズムを組織文化の特徴として確立するために、実験的なこころみにとりくみつづける。窮極的に、あらゆる戦略は、この瞬間の視野から将来を展望するものであり、それがあくまでもまだ生成していない状況にたいする想像であるという意味において、構造的な盲点を内包することになる。将来とは、自己の行動をとおして、その創造に参加する過程のなかで生成するものであり、それは常に神秘的なものとして存在しつづけるのである。

Strategistsは、こうしたことをこころえているために、自己の構築した戦略にとられることなく——ただし、それは戦略構築を軽視するというのではない（戦略構築能力は合理性段階において確立される重要な能力であり、それを軽視することは「前後の混同」にすぎない）——実験的精神を発揮して、多数の活動にとりくむことをとおして、真の意味で最善のものを獲得しようとするのである。そこでは、失敗とは、将来の積極的創造のためには、むしろ、あたりまえのものとして見なされるのである。⁶ また、**Strategist**段階の組織は、こうした実験的とりくみを構成員に可能とする組織構造を構築することに精力を傾注する（「実験的精神の構造化」）。

- 将来の経営者の組織内育成

Strategist 段階の組織は、組織の「核」となる理念が修得されるためには、実際には、長期的な徹底した「教育」（“indoctrination”）が必要とされることを認識している。とりわけ、そうした理念が人類の普遍的な価値を基盤として発想されている場合、真の意味でそれを修得するためには、個人の全人格的な教育が必要となることをこころえている。なかでも組織の経営者にとり、理念を修得するとは、それを自己の活動に反映させるだけでなく、また、それを組織の活動の隅々に反映させるために必要となる強力な指導力を発揮する責任を負うことを意味する。

窮極的に理念の維持が組織の存続の「鍵」となることを認識している **Strategist** 段階の組織にとり、将来の経営者の全人格的な教育にとりくむということは、最重要の課題として認識される。必然的に、こうした組織において、「核」の継承のための方法としての「後継者の育成」には、最大の関心と努力がはらわれることになるのである。

ケン・ウィルバー（2006）の指摘するように、組織とは、構成員の相互の共振空間（“regnant nexus”）として機能する装置である。つまり、組織とは、構成員の相互の対話のありかたを一定の範囲に規定することをおして、特異な共感を醸成するのである。**Strategist** 段階の組織において、組織の対話空間を組織の理念を基盤としたものとして確立するために、こうした共振空間の構築・維持・深化にたいする最大の責任をになうことになる経営者の全人格的な教育に多大

な注意がはらわれるのは当然のことであろう。必然的に、Strategist 段階の組織は、外部の経営者を採用することを回避しようとする。

- 継続的な向上にたいする献身

Strategist 段階の組織の文化は、継続的な向上にたいする献身に貫かれている文化である。そこでは、構成員は、成長にたいする飽くなき要求を自己につきつけることを自明の責任として包容して、それを徹底した規律にもとづいて果たしていく。また、組織は、そうした姿勢を要求するだけでなく、そうした姿勢を支援する構造を構築する。

ここでの重要概念は「規律」(discipline)である。例えば、インテグラル思想における統合的実践の構想 (ITP、または、ILP) に特徴的に反映されるように、Strategist 段階において、実践とは徹底した規律のもとに長期的にとりくまれるべきものとして理解される。つまり、実践とは、「ただそのために」(“For its own sake”) 果てしなくとりくまれるべきものとして理解されるのである。

Strategistsにとり、組織に所属するとは、窮極的に、組織の追求する理念に commitment することにほかならない。必然的に、Strategistsにとり、そこでの活動そのものが実践としての意味をもつことになるのである。つまり、Strategistsにとり、commitment というものは、自己の潜在的可能性を実現するための必須の方法としてとらえられるのである。⁷

こうした姿勢は、必然的に、Strategists を人間の構造的な自己保全の衝動にたいして非常に注意深くさせることになる。そこでは、意識状態(「気分’)にたいする過度の依存が内包する危険が明確に意識されることの結果、人間の構造的な自己保全の衝動を克服するために、規律というものが必要となることが認識されるのである。その意味では、Strategist 段階の組織は「居心地」のいいものではない。そこでは、自己保全の衝動にたいする執拗な攻撃が展開されるからである。むしろ、そこでは、そうした文化を構築することをおして、意図的に「居心地」の悪さを醸成しようとするダイナミズムが働くときえいうことができるのである。その意味では、Strategists とは、こうした過酷な状況のなかにこそ幸福を見出すことのできる非常に成熟した強靱性 (psychological resilience) を備えた人間であるということができるだろう。



上記は、あくまでも、Strategist 段階という行動論理を基盤とする組織の具体的・表層的な特徴にすぎない。従って、それらの基盤にある行動論理の構造について十分に理解することなしには、上記の特徴が必然的なものとして組織により長期的に体现される理由を理解することはできないだろう。その意味では、インテグラル心理学は、非常に有益な視点を提供してくれるということができる。

上述のように、**Strategist** 段階という行動論理は、まだ、人類の集合的構造として確立されたものではない。Collins & Porras (1994/2002) の調査が提供するの
は、あくまでも、その先駆的な顕現の事例にすぎず、今後の歴史の展開のなか
で、それがどのような深化を遂げることになるのかについては、今後、人々が
実際にそれを自己の行動論理として確立・体現するなかで明確化されてくるも
のなのだろう。今日の **Strategists** の課題とは、こうした可能性として開拓された
ものを具体的な表現として自己の成長をとおして実現していくことであるとい
えるだろう。

上記のように、真の意味でVision Logic (VL) と形容しえる意識構造は、Strategist 段階においてはじめて構築されるということができよう。そうした意識構造は、多様な視野を尊重するのみならず、また、それらを普遍性という文脈のなかでとらえなおすことをとおして、相互の関係性を認識する。こうした統合的な能力を発揮することができる時、その意識構造は、はじめてVLと形容しえるのである。

また、上記のように、こうした意識構造は、組織活動の領域において、非常に特徴的な行動を展開する。普遍的な価値にたいする信頼を基盤として自己の全存在を活動に投資することのできるその能力は、この意識構造にすぐれた創造性をもたらすことになる。これは、Individualist段階の問題である「自己にたいする執着」(“hyper-individualism”) (Griffin, 1989) から意識を開放して、Strategists に共同作業への献身的な参画を可能とすることになるのである。

しかし、あらゆる意識構造がそうであるように、Strategist段階も、また、独自の構造的な問題を内蔵している。敢えていえば、それは、成長という命題を絶対化することが必然的にもたらす自己と他者にたいする「非寛容」といえるだろう。

具体的には、それは、自らの潜在的可能性を完全に実現することができないことにたいする恐怖、または、自らが認識・信奉する普遍的な価値(例：寛容・正義・尊厳)を実際に尊重することができないことにたいする恐怖ということのできるだろう。Strategist段階の特徴である「自己成長」・「自己実現」への真摯な取り組みは、時として、こうした恐怖が現実のものとなるとき、Strategistsの内部に深刻な鬱状態を醸成することになる。

また、Strategistsのこうした成長への取り組みは、自己のみならず、他者にたいする関心としても表現されることになる。Strategistsは、しばしば、他者の自己実現の支援にすぐれた能力を発揮する。しかし、こちらの献身的な支援にもかかわらず、成長にたいする抵抗を経験するとき(例：相手が成長にたいする意志を発揮しないとき・相手が効率的に成長することができないとき)、Strategistsは、しばしば、そうした「怠惰」にたいして攻撃的になる傾向がある。自己にたいしてそうであるように、Strategistsは、成長の可能性の拒絶に直面するとき、寛容であることができないのである。

「成長」という命題を絶対化することによりもたらされる自己、そして、他者との緊張関係は、Strategistsにこの意識構造を対象化する契機を提供することになる。⁸ そして、Strategist段階におけるこうした構造的な問題と対峙することをおして、意識深化の過程は、いわゆる「トランスパーソナル」段階へと向かっていくことになるのである。

Alchemist段階 (5/6)

Susanne Cook-Greuter (2002) は、パーソナル段階からトランスパーソナル段階への移行段階を“Alchemist”段階、または、“Construct-Aware”段階と形容している。

この段階においては、体験というものが本質的に「自己」(“I”) という機能をとおして「構築」されるものであることが認識される。つまり、体験というものが、世界(内的・外的)をありのままに把握するのではなく、体験主体である自己という解釈機能をとおして、それを再構築する行為であることが認識されるのである。

とりわけ、ここでは、体験というものが言葉により強力に規定されるものであることが認識される。人間が、言葉をとおして、世界を「恒久的」(permanent)・「客観的」(objective) なものとして設定しようとする根源的な衝動にもとづいて生きる生物であることが洞察され、また、言語活動が、世界の本質である混沌に秩序をあたえる解釈行為であることが認識されるのである (“...reality is now understood as the undifferentiated phenomenological continuum or chaos...”)。つまり、体験というものが、本質的に、人間をありのままの世界から疎外するものとならざるをえないことが実感されるのである。

全ての人間は、混沌とした世界と対峙する存在であるという意味において、結ばれている。しかし、同時に、自己という装置をとおして体験を構築することをとおして、相互から疎外されている存在でもある。個人・個人は、自己の認識機能をとおしてしか世界を体験することはできない。そして、それぞれの認識機能の枠組は完全に同じであることはないのである。

混沌から秩序を創造するという人間意識の本質的な機能にたいする洞察にもとづいて、人間存在の根本的な制約条件と対峙することをとおして、パーソナル段階からトランスパーソナル段階への移行が展開していくことになる。

人間性との対峙

上記のような人間意識の根源的な機能にたいする洞察は、Alchemistsの内部に、認識行為というものが、本質的に、自己を機軸として展開する「自己中心的」(“ego-centric”) な行為とならざるをえないことへの問題意識を醸成することになる。ここでは、「個」であるということそのものが人間存在の制約条件として問題視されることになるのである。また、こうした洞察は、自己による認識行為を規定する「秩序の創造」にたいする批判的な精神を醸成することにもなる。つまり、世界の把握という命題のもと、言葉を駆使して、複雑な地図を作成することの意義が懐疑されることになるのである。

Construct-Aware段階は、「意味構築活動」(“meaning-making activity”) の主体としての「個」を対象化するはじめての発達段階であるということができよう。この段階において、人間は、自己が本質的に自己保全衝動にもとづいて

機能する存在であることを喝破する（こうした自己の構造的衝動は、インテグラル思想において、“Atman Project”と形容されているのは周知のところである）。彼らは、意味構築活動が本質的に解釈行為であるという意味において、窮極的には、真実は自己の活動をとおしては知ることができないことを認識するのである。ここでは、また、人間の認識を特徴づける対極的発想（例：善と悪・生と死・美と醜）が、実際には、世界を把握するための解釈の枠組にすぎないことが認識される。

こうした人間性の根本にたいする洞察を基盤として、**Alchemists** は人間が人間であることに起因する問題と対峙しようとする。

こうした態度は、例えば、世界を把握するための「理論」や「説明」を希求する自己の強烈な欲求との対峙として顕現する。**Alchemists**は、世界を知的に把握することをおして平衡（equilibrium）を醸成しようとする意識の自動的な習慣が、窮極的には、自己の実在感覚（sense of substantiality）を増幅しようとする、いわば、存在の本質の拒絶のころみであることを察知する（Loy, 1996）。この段階においては、あらゆる文化的な多様性を超えて機能する、こうした人間の構造的・普遍的な性質——言葉を用いて、自己の実在感覚を増幅しようとする性質——を克服することが模索されるのである。⁹

非言語体験の統合

人間の意識活動における言語の重要性と制約性が認識されるなかで、**Alchemists** は、しばしば、非言語領域とのつながりを深めていくことになる。こうした意識の深化は、普通、直感・身体感覚・感情・夢・元型等、非言語体験の経験・統合の能力の成熟として実現する。つまり、こうした過程のなかで、**Alchemists** は、世界を把握するうえで、言語のみならず、非言語的・非合理的な知恵の源泉を尊重することを重視するようになるのである。また、この段階においては、しばしば、「至高体験」といわれる瞬間的に日常的な自己の境界を超越する体験が経験されるようになる。こうした体験は、**Alchemists** をさらなる意識深化へと誘うことになる。

孤独との対峙

Construct-Aware 段階において個人が直面する代表的な苦悩は、自己の洞察を共有することのできる他者を見いだすことができない可能性にたいする恐怖であるといえる（また、実際、こうした成長段階が非常に稀有のものであるという意味においては、それが単なる杞憂ではないことはいうまでもないだろう）。自己の複雑な認識構造を共感的に共有することのできる他者を見いだすことができないことが醸成する孤独感は、時として、**Alchemists** を絶望に陥らせることになる。また、そうした自己認識が内包する自己を特別視する態度そのものを問題視することのできる **Alchemists** の批判的精神は、彼らを複雑な内省の迷路

に陥らせることになる。人間の構造的な問題にたいする透徹した洞察は、こうして Alchemists を特有の苦悩の循環にとらえることになるのである。

このような高度の成熟の苦悩を背負う Alchemists にとり、それまでの成長段階を特徴づける単純さと素朴さ (simplicity) は、しばしば、羨望の対象として経験されることになる。しかし、この段階の精神的な成熟は、Alchemists に——自己の根源的な孤独と絶望を見据えながら——自らの運命を自己の責任にもとづいて果敢に抱擁することを可能とする。それは、人間としてこの世界に生命をあたえられてあることが内包する根源的な苦悩と対峙して、そして、そのなかに建設的な解決策を創造していこうとするありかたと形容することができるだろう。

関係性

人間性の本質にたいする透徹した洞察は、人間関係の領域において、Alchemists に非常に優れた洞察能力をもたらすことになる。Strategists が成長を絶対化する傾向にあるのにたいして、Alchemists は、成長を対象化することができるために、個人・個人をありのままに受容することができるようになるのである。

成長という価値を絶対化することは、必然的に、Strategists の構築する人間関係を実現志向のものにすることになる。そこでは、あくまでも、成長とは善であり、成長への可能性を抑圧することは回避されるべきであると信じられるのである。しかし、実際には、成長への可能性を実現することができたときにもたらされるのは——非常に皮肉なことに——窮極的にはそれそのものが人間の構築した虚構にすぎないということにたいする認識である。Alchemists は、実際に成長という虚構を生きることをとおして、それが虚構にすぎないことを自覚するのである。

こうした過程を実際に完遂することは、Alchemists に独特の視野をもたらすことになる。それは、人間を自己の選択した「虚構」を生きる権利を有した存在として抱擁する視野であるといえる。

人間とは、自己の責任において、意味構築活動を展開しながら生きていく権利を有している。また、それぞれの意味構築活動は、この世界のなかで営まれることをとおして、本質的に、変化 (深化) することを宿命づけられた営みである。世界の本質を俯瞰する視野にもとづいて、Alchemists は、人間というものを刻々と深化しつづける存在として抱擁することをとおして、その自然な変化の過程に寄り添おうとするのである。

この世界において、あらゆるものは変化のただなかにあり、個人・個人はそうした文脈のなかで自己の人生を生きていくことにならざるをえない。そうした認識にもとづいて、Alchemists は他者を絶対的な孤独のなかで変化の過程を生きるものとして尊重するのである。

相手の内的世界にたいする洞察と尊重にねざしたこうした包容力は、人間関係の領域において、**Alchemists** にひときわすぐれた感受性と適応性をもたらすことになる。

自己の責任にもとづいて意味構築活動に従事する存在として他者を抱擁することをとおして——つまり、相手の経験する内的世界が、その独自性において、窮極的には、こちらに理解することができないものであることを認識することとおして——**Alchemists** は、その内的世界を内部から経験するための感受性を獲得する（真の共感とは、存在の基盤である、実存的な孤独を抱擁することができて可能となるものである）。そして、これは、必然的に、**Alchemists** に相手の認識構造に絶妙に適応した対話を行うことを可能にするのである。ここでは、**Strategist** 段階でなされるような、自己を絶対化したうえで、同等のレベルへと他者をひきあげようとする「責任意識」が積極的に拒絶されることになるのはいうまでもない。

ある価値を絶対化したうえで、それを基準として他者の存在にはたらきかけることを意識的に忌避するという意味において、**Alchemists** のありかたは、**Strategists** のありかたの対極に位置するものであるということができよう。実際、**Susanne Cook-Greuter** (2002) の指摘するように、**Alchemists** は、時として、成長の潜在的な可能性を実現することに執着する **Strategists** のありかたにたいして最も批判的となる人々である。**Alchemists** にとり、**Strategists** のそうしたありかたは、本質的に、自己の信奉する価値を絶対化する自己中心的なありかたとして見なされるのである。また、そうしたありかたは、常に将来を志向することをとおして、現在という瞬間を疎かにするものであるという意味において、大きな問題を内包するものとして判断されるのである。

こうした姿勢を反映して、**Alchemists** は、組織活動の領域においては、しばしば、変革の触媒 (**catalyst**) としての役割を果たすことになる。自己の問題意識を人間存在の根本的な問題に向けながら、**Alchemists** は、その克服のために自己にできる最高の貢献を模索しつづけるのである。

その意味では、**Alchemists** の関心は、具体的な組織を構築・維持・発展することにたいしてではなく、むしろ、人間存在という問題そのものに向けられているということができよう。¹⁰ こうしたありかたにもとづいて、**Alchemists** は、組織活動に変革の触媒として参画するが、自己の責任が終了したときには、そこからすばやく立ち去ることができる人々である。彼らの関心は、あくまでも、自己の必要性を無くすことにあるのである（つまり、組織が、自己の支援なしに、自己変革・自己組織することができるものとなることが希求されるのである）。

課題

Construct-Aware 段階の課題とは、人間存在の構造的な問題を洞察するその透徹した認識能力が醸成する絶望を克服することであるといえる。この発達段階において、あらゆる価値観は、人間が自己の実在感覚を増幅するために構築した虚構にすぎないことが認識される。そして、そうした衝動にもとづいて生みだされたあらゆる創造物が、窮極的には、朽ちていくものであることが認識されるのである。

Alchemists にとり、それらが永続するものであるという前提のもと、Atman Project の一環として、構築物の構築作業に参画することは、人間存在の根源的問題の温存に参与することにほかならない。Alchemists にとり、それは虚構の蔓延に荷担することにほかならないのである。

必然的に、こうした問題意識は、Alchemists の人間の創造活動にたいする信念を溶解する危険性を内包することになる。そして、ひいては、これは、この世界における人間の営為そのものにたいする絶望として結実する危険性をも内包している。

Construct-Aware 段階において、Strategist 段階を特徴づけていた「確信」と「自信」は失われ、われわれは、トランスパーソナル段階への関門となる危機（“Dark Night of Soul”）を経験することになるのである。

Alchemistsの内的世界が物語るように、「意味構築構造」(“Meaning Making Structure”)の成長は、自己の内省力(reflexivity)の深化を押しすすめ、最終的には、成長という現象そのものにたいする内省を可能とすることになる。そこにおいて、人間は、成長というもの——そして、その体験主体である自己というもの——にたいする根源的な問いを発することになるのである。主体としての自己の本質にたいするこうした透徹した視線はConstructive-Aware段階においてはじめて確立される能力であるが、個の完成を特徴づけるそうした能力が個であることの意味を根源的に懐疑するものであるという事実は、現象世界(manifest world)というものが、進化のダイナミズムにより特徴づけられることをとおして、構造的に内蔵する矛盾を端的に象徴するものであるといえるだろう。

Alchemistsの特徴とは、現象世界が構造的に内包する矛盾を認識したうえで、それがもたらす複雑性を意識的に活用しながら、変容のための責任を果たすことができることである。現象世界が変化の只中にあることを認識するAlchemistsは、あらゆる存在の流動性を注視しながら、その創造的な展開に携わろうとするのである。現象世界のなかで展開するものごとを俯瞰するこうした姿勢はAlchemistsに卓越した柔軟性に特徴づけられた行動力をもたらすことになる。それは、人間性の本質にたいする透徹した洞察が可能とする軽やかさと形容することができるだろう。

しかし、あらゆる意識構造がそうであるように、Constructive-Aware段階も、また、独自の構造的課題を内包している。Constructive-Aware段階において、人間は、はじめて、世界の本質を洞察する視野を確立する。しかし、ここで留意すべきことは、こうした姿勢が構造的に世界の本質を洞察する認識者としての立場にたいする執着を内蔵するものとならざるをえないということである。つまり、そこにおいて、Alchemistsは、自己の認識存在としての複雑性にとらえられることになるのである。Constructive-Aware段階のこうした構造的な特性は、洞察という行為が内包する疎外感覚を増幅することをおして、必然的にAlchemistsの孤独感を悪化させていくことになる。Constructive-Aware段階においては、内省力の深化というそれまでの意識進化の過程を特徴づけていた基本法則が、「解放の機能」として、その限界に到達するのである。

Unitive段階 (6)

Susanne Cook-Greuter (2002) は、Constructive-Aware 段階の高次の段階を Unitive 段階と形容する。この段階において、意識発達の過程はいわゆる「トランスパーソナル」と形容される段階に到達することになる。この段階において、認識のありかたは根本的な変容を遂げることになる。そこでは、それまでの段階における認識を規定していた、本質的に言葉(symbol)を媒体とした「意味構築活動」(“Meaning Making Activity”)が超越されることになるのである。

David Loy (1996) の指摘するように、「個」とは、意味を構築することをおして自己の「実在感覚」(“sense of substantiality”)を確保しようとする存在である。そこには、常に、窮極的には自己が虚構にすぎないものであることにたいする認識が息づいている。結果として、そうした認識は、自己の本質である虚構性を拒絶して、その溶解を回避しようとする自己増幅活動 (“Atman Project”)へと人間を巻き込んでいく。

Constructive-Aware 段階における、自己増幅衝動に特徴づけられる自己の構造的な性質にたいする認識は、意味構築活動の背後に存在する虚無との対峙を可能とする。そこにおいて、Alchemists は、意味構築活動が構造的に内包する限界を認識(対象化)することをおして、その束縛から自己を解放しようとするのである。しかし、Alchemists のこうしたところみは、窮極的には、Constructive-Aware 段階の限界を克服することはできない。認識という行為は、本質的に、主体 (subject) と客体 (object) を創造する行為とならざるをえず、そのために、それは不可避的に自己増幅の行為とならざるをえないのである。つまり、そこでは、まだ、認識という活動をおして自己の背後に存在する虚無への埋没を回避しようとする自己増幅の衝動が意識を規定しつづけているのである。

自己増幅活動は自己溶解の恐怖を醸成することになる。また、自己溶解の恐怖は、自己増幅活動を促進させることになる。Atman Project とは、人間が個であることをとおして内包する構造的な特性であるということが出来るが、それを解決するためには、実際には、洞察だけではなく、自己として死ぬことが必要となるのである。Unitive 段階とは、こうした関門を潜りぬけたところろにひろがるあたらしい地平であるといえるだろう。

永遠性・普遍性にたいするまなざし

Unitive 段階において、Ironists は人間(自己と他者)を「創造的基盤」(“Spirit”・“Creative Ground”)の顕現として認識する。個人は、人類という生物種が背負う進化という宿命の実現に参画する存在として認識されるのである。

個人の存在は、こうした大局的な視野から、集合的存在との関係性のなかでとらえなおされる。また、こうした関係性にたいするまなざしは、同時に、人間が個であることをとおして構造的に背負うことになる絶対的な孤独を抱擁することを可能にする。そこにおいては、関係性と自律性という人間存在を特徴づける対極的特性が、それを溶解することなく、統合されるのである。つまり、それらは、異なる視点をおして照明される、人間存在のあらわれかたとして認識されるのである。

また、Unitive 段階においては、個人の存在は永遠性・普遍性の視点からとらえなおされることになる。Ironists は、誕生・成熟・老衰という、全ての人間がた

どる人生の旅路を世界の本質である変化の法則の自然な発露として受容するのである。

Unitive 段階においては、諸々の意識状態にたいする主体的な関係性が獲得される。Ironists は、人間意識というものが様々な意識状態のなかで立ち上がるものであることを認識することをおして、それぞれの意識状態が提供する認識の枠組を受容するのである。意識状態にたいする感性の確立は、結果として、Constructive-Aware 段階の重要懸案である言語を基盤とした意味構築活動の構造的限界の克服にたいする執着から個人を解放する。Ironists にとり、それは、克服すべき問題ではなく、むしろ、刻々と展開する意識状態の変化の過程のなかで顕在化するひとつの人間の特性に過ぎないのである。

Unitive 段階において達成される意味構築活動の超越は、Ironists に意味構築活動の本質である価値判断からの解放をもたらす。そして、それは、あらゆるものを創造的基盤の同等な顕現として認識する包括的 (“Unitive”) な視野をもたらすのである。ここにおいて、Ironists は、日常の矮小な具体的現象のなかに、永遠性と全体性を見いだすことができるようになる。つまり、Ironists は、砂ひとつのなかに、世界を見いだすことができるのである (“Ironists can see a world in a grain of sand...”)。

また、こうした永遠性・普遍性にたいする感覚を基盤とする包括的な認識構造は、他者を（そのひとの本質を尊重したうえで）ありのままに抱擁することを Ironists に可能とする。全ての人間は、どの発達段階にあらうとも、刻々と展開する進化の過程に参加するかけがえのない存在である。永遠性・普遍性にたいする感覚を基盤とするこうした認識構造は、また、同時に、個人というものが——たとえその業績がいかに偉大なものであらうとも——進化という大河のなかでは、一滴の水滴ほどの存在価値しかもたないものであることを認識する謙虚さを内蔵している。

こうした謙虚さのもとに、人間（自己と他者）をありのままに受容する Unitive 段階の意識構造は、Ironists に根源的な安心の感覚をもたらすことになる。そして、それは、Ironists に合理的に構築された価値体系の束縛を回避して、根源的な自由 (radical freedom) を抛りどころとする世界との携わりを実践することを可能にするのである。諸々の外的な条件（例：成長度・年齢・性等）の背後に存在する「本質」 (“Essence”) にたいするまなざしは、Ironists のなかに、あらゆる存在が内包する根源的な尊厳にたいする尊重の姿勢を醸成する。周囲の人間は、Ironists とのやりとりのなかで、自らが無条件に尊重されていること、そして、自らが深く満たされていることを実感するだろう。

葛藤の受容

Unitive 段階における意味構築活動の根源的な超越は、必然的に、それまでの発達段階を特徴づけていた問題・課題の解決という自己の構造的な衝動からの解放を可能とすることになる。Ironists にとり、葛藤 (conflicts) とは、もはや、解決されるものではなく、人間として存在することが構造的に内包する条件なのである。Ironists にとり重要なことは、ある目的 (段階・状態) を設定して、その実現を追及することではなく、むしろ、永遠性・普遍性にたいするまなざしを基盤とする大局的な視野から、進化が要求する行動を創造的に展開することなのである。世界を俯瞰する目撃者・観想者としての姿勢は、Ironists に世界の進化にたいする責任を抱擁させる。存在の本質的な価値 ("Ground Value") の認識をもとに、Ironists は、あらゆる価値判断から解放されたところにひろがる根源的な自由に他者を導こうとするのである。

慈愛

上述のように、Constructive-Aware段階の問題意識は、言語を基盤とした意味構築活動の構造的限界を克服するということである。意味構築活動が個としてあることが内包する根源的な衝動 (「死の拒絶」) を基盤とするものであるという意味において、それは人間性そのものと対峙する姿勢に貫かれたものであるということができよう。しかし、Unitive段階においては、こうした人間性にたいする透徹した洞察は、それを解決すべき問題として認識する対峙の姿勢ではなく、むしろ、それを人間としてあることが構造的に内包する欲求として、すなわち、全ての人間を結びつける「絆」として認識されることになる。そこにあるのは、窮極的には、生きとし生けるものが生きるということをとおして背負うことになる根源的な宿命にたいする共感と慈愛であるといえるだろう。世界に存在するありとあらゆるものとの同胞感覚 ("affiliation") は、生きるということが体現するこうした根源的な衝動の受容をとおして確立されるのである。

生命への奉仕

Ironists としての意識構造を確立するとは、この惑星において脈々とつづく生命の歴史にたいする責任を抱擁することである。そして、この惑星における生命の歴史にたいする責任を抱擁するとは、過去・現在・将来というものを包含する悠久を抱擁することである。そこにおいて、Ironists は、この瞬間、自らが存在していることを、惑星における生命の進化に参画するための責任を全うするための機会としてとらえなおして、生きていくことになるのである。

われわれが個人としてこの世界に存在する期間は微々たるものである。われわれは、刹那のあいだ、この世界に個人として存在したあと、再び存在の基盤である創造的基盤へと回帰していく。その意味では、個人としてあるとは、自己を創造的基盤からあえて疎外することをとおしてあたえられる「存在の状態」といえるのである。そこにおいて、われわれは、生命の歴史にたいする奉仕の

責任を抱擁して、世界が刻々と開示する真理にもとづき、自己の可能性を実現していくことになるのである。

Unitive 段階において、真理とは、世界そのものが内包するものとして認識される。それは、合理的な方法をとおして獲得・蓄積されるものではなく、むしろ、自己を「空」(open)にして、世界に参加するなかで開示されるものなのである。

個としてあることが構造的に内包している「疎外性」(separateness)と「刹那性」(transiency)を認識したうえで、それを永遠性と普遍性の視点から積極的に生きることを選択するIronistsの「行動論理」(“Action Logic”)は、真の意味でトランスパーソナルと形容することのできる最初の段階である。そして、21世紀において、人類の集合的な意識進化の過程は、はじめて、こうした構造を集合的な規模で構築しようとしているのである。¹¹

参考資料

- ジェームズ・コリンズ (1995) ビジヨナリー・カンパニー：時代を超える生存の原則 (日経 BP 出版センター)
- ジェームズ・コリンズ (2001) ビジヨナリー・カンパニー2：飛躍の法則 (日経 BP 出版センター)
- Ernest Becker (1973). *The denial of death*. New York: Free Press.
- Ernest Becker (1975). *Escape from evil*. New York: Free Press.
- Jim Collins (2001). *Good to great: Why some companies make the leap...and others don't*. NY: HarperCollins.
- Jim Collins & Jerry Porras (1994/2002). *Built to last: Successful habits of visionary companies*. NY: HarperBusiness Essentials.
- Allan Combs (1995/2002). *The radiance of being: Understanding the grand integral vision; Living the integral life*. St. Paul, MN: Paragon House.
- Susanne Cook-Greuter (2005). Ego development: 9 levels of increasing embrace. Available at <http://www.cook-greuter.com/>
- Susanne Cook-Greuter (2005). On the development of action logics. Available at <http://www.cook-greuter.com/>
- Jorge N. Ferrer (2002). *Revisioning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality*. Albany: State University of New York Press.
- James Fowler (1981). *Stages of faith: The psychology of human development and the quest for meaning*. San Francisco: HarperSanFrancisco.
- James Fowler (1996). *Faithful challenge: The personal and public challenges of postmodern life*. Nashville, TN: Abingdon Press.
- David Ray Griffin (1989). *God and religion in the postmodern world: Essays in postmodern theology*. Albany: State University of New York Press.
- David Loy (1996). *Lack and transcendence: The problem of death and life in psychotherapy, existentialism, and Buddhism*. Amherst, NY: Humanity Books.
- Brad Reynolds (2004). *Embracing Reality: The integral vision of Ken Wilber*. NY: Jeremy P. Tarcher/Penguin.
- Brad Reynolds (2006). *Where's Wilber at?: Ken Wilber's integral vision in the new millennium*. St. Paul, MN: Paragon House.
- Bill Torbert and associates (2004). *Action inquiry: The secret of timely transforming leadership*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers.
- Ken Wilber (1983/2001). *Eye to eye: The quest for the new paradigm*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1995/2000). *Sex, ecology, spirituality: The spirit of evolution*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1997). *The eye of spirit: An integral vision for a world gone slightly mad*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1999). *One taste: The journals of Ken Wilber*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2000). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2001). *A theory of everything: An integral vision for business, politics, science, and spirituality*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2002). Introduction to excerpts from volume 2 of the Kosmos Trilogy. Available at <http://wilber.shambhala.com/>

Ken Wilber (2002). Excerpt A: An integral age at the leading edge. Available at <http://wilber.shambhala.com/>

Ken Wilber (2002). Excerpt B: The many ways we touch: Three principles helpful for any integrative approach. Available at <http://wilber.shambhala.com/>

Ken Wilber (2002). Excerpt C: The ways we are in this together: Intersubjectivity and interobjectivity in the holonic Kosmos. Available at <http://wilber.shambhala.com/>.

Ken Wilber (2002). Excerpt D: The look of a feeling: The importance of post/structuralism. Available at <http://wilber.shambhala.com/>.

Ken Wilber (2006). *Integral spirituality: A startling new role for religion in the modern and postmodern world*. Boston: Shambhala.

注

- ¹ 具体的には、“dominant monad”を有する“Individual Holon”にたいする「支援と挑戦」の空間として、“Social Holon”が“dominant mode of discourse”、または、“predominant mode of mutual resonance”をとおして機能するということである。
- ² Individualist段階において「統合」がこころみられる場合、あくまでも多様な存在を水平的に陳列するだけで、高度の段階からそれらを構成要素として抱擁したうえで関連づけるといった垂直的な統合は実現されない。
- ³ 「対極性の統合」の詳細については、<http://www.integraljapan.net/> に掲載されている「対極性の管理」（第1回）と「対極性の管理」（第2回）を参照していただきたい。
- ⁴ これについて、Collins & Porras (1994/2002) は、次のように述べている。“It’s not what they believed as *how deeply they believed it* (and how consistently their organizations lived it). Again, the key word is *authenticity*. No artificial flavors. No added sweeteners. Just 100 percent genuine authenticity” (p. 76).
- ⁵ ただし、これは、あくまでもStrategist段階の組織の傾向であり、必ずしも、すべてのStrategist段階の組織に当てはまるものではないことをCollins & Porras (1994/2002) は指摘している (p. 94)。
- ⁶ “Since you can’t tell ahead of time which variations will prove to be favorable, you have to accept mistakes and failures as an integral part of the evolutionary process” (Collins & Porras, 1994/2002, p. 183).
- ⁷ Individualist段階において、commitmentというものが、基本的に、自己の自律性にたいする干渉としてとらえられるのと対照的であることに留意されたい。
- ⁸ James Fowler (1996) は、「恥」 (“Shame”) とは、自己が内包する高次の可能性を裏切ることに起因する感覚であると指摘する (逆に、「罪」 (“Guilt”) とは、共同体の規範を逸脱することに起因する感覚である)。この定義によれば、Strategistsとは、最も強烈に恥の感覚を経験することができる人々であるということができるだろう。
- ⁹ ただ、ここで留意すべきことは、こうした言語にたいする問題意識が必ずしも言語の否定や忌避として結実するわけではないということである。こうした問題意識は、実際には、人間の精神活動において言語が果たす役割の重要性にたいする透徹した洞察にねざしたものである。それは、また、言語というものがもつ可能性にたいする尊重として顕現することになる。
- ¹⁰ もちろん、これは、こうした活動において、Alchemistsが有能でないということではない。Strategist段階において確立されるそうした能力は、ここでも確実に継承されることになる。
- ¹¹ 非常に皮肉なことは、トランスパーソナル運動が、こうした段階への集合的な意識進化を醸成する触媒 (catalyst) としての責務を果たすことに失敗しているということであろう。今日において、トランスパーソナル運動は、「自己探求」や「自己実現」等、先進国の富裕階層の欲求を充足することを自己の責任範囲として設定した、典型的なindividualist段階の思想運動として活動を展開し

ている。トランスパーソナル運動は、少数の例外をのぞいて、意識状態に調査・研究の焦点を絞ってきたが、こうした文化的特性は、自己の内的体験を絶対化するindividualist段階の構造的特性を端的に表現するものといえるだろう。結果として、トランスパーソナル運動は、意識構造の段階的な発達についての調査・研究をとおしてのみ可能となる人間存在の重要領域を看過することになる。そして、そうした視野狭窄は、必然的に、自己の視野を定義しているindividualist段階の構造的特性にたいする無自覚を醸成することになる。

KW (1995/2000) は、individualist 段階の構造的特性に起因する内的体験の過剰評価は、必然的に、自己中心性の肥大化を促進することをとおして、感覚主義や個人主義等、還元主義 (“Flatland”) の病理の蔓延に加担することになることを喝破する。実際、多くのトランスパーソナルの活動形態は、主に「自己探求」・「自己実現」等を目的とする体験的なトレーニングであり、そこにおいて追求されるのは、窮極的には、諸々の充足感覚 (例：幸福感・至福感) に特徴づけられる非日常的な意識状態でしかない。確かに、そうした非日常的な意識状態を体験することに価値があることはいうまでもないが、しかし、ここで留意すべきことは、そこでは、そうした意識状態を体験しようとする姿勢そのものは対象化されることはないということである。また、そうした活動は、関係者のあいだに、非日常的な意識状態の「提供者」と「消費者」という経済的・精神的な相互依存の関係を構築することをとおして、individualist 段階の構造的特性の固着化を促進する危険性を内蔵している。こうしたありかたが、トランスパーソナル段階への意識構造の段階的な発達の促進というトランスパーソナル運動の責務を事実上放棄するものであることはいうまでもないだろう。周知のように、近年、国内・国外において展開しているNew Age思想の興隆は、非日常的な意識状態の商品化を急激に推しすすめている。今日において、非日常的な意識状態の提供という経済活動は、もはや、トランスパーソナリストの占有領域ではなくなったのである。こうした動向は、必然的に、国内・国外において、トランスパーソナル運動の存在価値を動揺させている (例えば、国内・国外の関連組織の構成員は、近年、明確な減少傾向にある)。いずれにしても、時代状況の変化によりもたらされた存続の危機をトランスパーソナル運動が克服することができるためには、まず、その文化の重心をStrategist段階へと進化させることが必要となるだろう。